

○ワークショップ「CSR 概念と USR 概念」

開催責任者 外国語学部 加藤泰史

2011 年 10 月 22、23 日

南山大学名古屋キャンパス R 棟 53 教室/J 棟特別合同研究室



ワークショップは以下のとおり、開催された。

◇報告者および題目

カロリーナ・グリュンシュロス「Das Konzept USR in Deutschland」；清水真木「大学に教養はあるか」；高畑祐人「USR とは何か——CSR の拡張としての USR?——」生方亨／村上豊「ISO26000 の麗澤大学における活用について」；西山雄二「『哲学への権利』を読む——カタストロフィを前にした大学」

◇ワークショップの討論内容

ワークショップ全体を通して、組織の社会的責任（OSR）の下位概念としての大学の社会的責任（USR）という共通理解の下で、現代の社会状況下（少子化・規制緩和）における大学の存在意義、企業の社会的責任（CSR）との関連性という問題が議論された。

グリュンシュロスは、ドイツにおいて USR の意味内容はいまだ確定的なものとはなっておらず、また戦略的な側面が前面に出ていることを指摘しながらも、いくつかの大学の USR の取り組みの事例を紹介しつつ、USR の今後の展開に関する一つの方向性を示した。清水は、“大学に教養はあるか”という挑発的なテーマで、社会からの要請という理由で、たとえば初年次教育という仕方でカリキュラム化された教育内容の指導をもって、大学が学生に教養を与えることができるという発想に警鐘を鳴らした。その場合の教養は、いわゆる古典的教養とは異なるとしても、いかなるものであるのかという点をめぐって討論が繰り返

広げられた。高畑は、USR 研究会の報告書における USR 理解を取り上げた。USR 研究会は、これからの大学が「教育・研究」に安住してばかりおられず、健全で合法的な経営の体制作りが急務だという背景から USR を捉えているが、そうした USR 理解は、利潤追求を第一義としない大学には適さず、大学の社会的責任は教育研究においてこそ果たされるべきであることを指摘し、そうした大学の社会的責任の在り方をめぐって討論が展開された。生方／村上は、その勤務校である麗澤大学において ISO26000 がいかに導入され、いかに実行されているのかを紹介し、USR において“建学の精神”が一定の役割を果たしうることをめぐって討論がなされた。西山は、J.デリダの「国際哲学コレージュ」上映の活動を通じた経験をふまえつつ、人文学／哲学の役割という観点からこれからの大学の在り方に一石を投じた。討論の中では、制度としての大学と運動としての大学といった対比の意義や大学の自己意識の消滅といったことが取り上げられた。

◇研究成果発表

グリュンシュロス、清水、高畑、西山の4人については、南山大学・地域研究センター共同研究の研究成果をまとめた論文集『ボローニャプロセス以後の欧米を中心とした大学制度の変貌と新しい学問状況』（仮題）において発表予定である。

